

何故か、の姿勢

馬場 駿

周知のように、江戸城を築城した太田道灌は、謀反の疑いをかけられているのを承知の上で、たった七人の家臣を連れて相模の國の府第（ふだい）に赴き、主君上杉定正の手のものによって暗殺された。希代の軍師が何故わざわざ殺されに？ 上梓した拙作『小説太田道灌』は、そもそもこの疑問から始まった。

十数年前、伊東図書館で手にした小冊子。そこには首をひねる作家水上勉がいた。南北朝の七人の天皇から国師と仰がれた夢窓疎石（むそうそせき）が天寿を全うして逝った際、それを知った諸国の庭造り人夫、謂わば土工たちが、万単位の数で京の都に集結したというのだ。夢窓は禅の頂点にあり、天皇の師でもある。その位人臣（くらいじんしん）を極めた夢窓を、何故「蟲（むし）」扱いされていた最下層の者たちが慕い、その葬いのために集うたのか。私の知る「夢窓」は、鎌倉瑞泉寺を開山（かいさん）した禅僧、でしかなかった。胸の中で何かが蠢（うごめ）いて私は、とりあえずネットで簡単に入手できる史料を漁った。あるわあるわ、プリントは、瞬

く間にA四版で四センチの分厚さになった。次いで、国立国会図書館にアクセスし、夢窓関連の書籍を検索した。驚く無かれ、映画のタイトルローリングよろしく出てきたその数の多さと、学術的なレベルの高さを感じさせる著者、そして出版社の名。私は一気に萎えたのを憶えている。

折角の資料は積まれ、或いは詰められたままになり、歳月は流れ、当初の情熱は冷めていった。

何の折かは忘れたが、ふと、こう思った。「お前、夢窓の研究論文でも書く気だったのか。夢窓と土工たちの造園を通じての心の触れあいには、何故、と興味を感じた。その動機をどこへ置き忘れて来たんだ」と。

推理小説でも恋愛小説でも、執筆動機の失念や質的変換はよくある。登場人物が創り手から独立分離し、勝手に台詞を吐き、「行動」を起してしまふことがあるからだ。尤もその方が優れている場合が多いのだが。ただ、いま問題となっているのは、超有名な歴史上の人物なのだ。「必要な史料は、所期の目的に照らせば、『疎石と蟲』の心を描くのに不可欠なものだけいい」。

ともあれ「なぜか？」には不思議な力がある。